# 散歩のイロハ。

スケープゴート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
散歩のイロハ。

【Ｎコード】
Ｎ５８９１Ｔ

【作者名】
スケープゴート

【あらすじ】
少女と飼い犬リンとの不承の散歩。

「そっちには行きたくないんだってば」
そう言ってリードを思いっきり引っ張ってもリンは四つの足を踏ん張って小道の方へ進んでいく。
飼い始めてから十年は経っている。老犬という括りに入っているはずなのに、まだまだこれから現役という少女には負けない。
彼女は珍しく散歩に乗り気だった。いつもは鎖がつながれている木陰で組んだ足に顎を乗っけて寝そべっていて、リードをつけてイザと勇み足を踏んでも岩のように動きもしない。犬のくせにだらしない、と言ったってしょうがないのだけど彼女は本当にうずくまったまま動かないのだ。

今日は雨が降っていた。
雨が降っていた、と言っても日の光は眩しく、ところどころに薄い空の色も見えている。どっからか風にのって飛んできた雨なのかと納得した。
飛んできた雨粒でも干しっぱなしの洗濯物に当たれば濡れてしまう。たとえ雨粒がどんなに小さくてどんなに少なくてもだ。
畑から収穫してきたサヤエンドウのサヤをむいていたおばあちゃんを促して、表の洗濯竿を片方づつ肩にかけて裏の釣鐘にかける。揺れる洗濯物たちにふっと満足げに息をつき、表につないだままのリンを裏に避難させるべくもう一度表へ戻った。
リンは雨が嫌いだ。ついでに雷とお客は大っきらいだ。後者に至ってはむせるほど鳴き、前者は老体を細い屋根の影に縮こませる。
「リンー、待ったかいー」
雨の日は声をかけても縮こまったまま、声のした方に顔をむけるだけにとどまる。そして雨の当たらない安全なところに向かうのだ

とわかるとこちらに飛びついて甘え声を上げる。私はこいつのこの時のリアクションが好きだった。
　ところが今日はいつもとは違うようで、声をかけて顔をのぞかせた途端にリンはリードを銜えて私に向かってきた。びよん、とい飛びかかったリンのせいでハーフパンツにリンの足型の泥が付いた。
「こんちきしょう〜。どうしたリン。珍しいね、お前が飛びかかるなんてさ」
　じっとしてろ、と声をかけながら跳ね回るリンの鎖を解いてリードにかけかえてやる。裏の、雨の当たらない場所には掛けがねしかなく鎖がないので、仕方なくリードで代用する。
「よし、いいよとわっ！」
　リードに掛けかえて腰を上げた瞬間、リンは待っていたようにいつもの散歩コースへ向かいダッシュした。常に見ない全力疾走に隙を疲れた形となり、不安定なバランスのサンダルをカクカクさせながら私はリードに引きづられていった。
　裏の畑を通った時にはぬかるんだ地面にサンダルがめり込み、かかとを汚した。大股で走るために、後ろに跳ね上げた泥のつぶが背中にピチピチ飛んでくるのがわかる。今日着ているTシャツの色を思い出して泣きたくなった。
「白地だ。表柄だ。お母さんに怒られる」
　怖がって足をすくませる細い手作りの橋も私を待たずに直線で走りきり、どっかの誰かが放置したままのうんにょさえも気にかけず通り過ぎ、おしっこの定位置の背が高い草むら草むらさえも無視して走る。
「ああもう、どこに行きたいんだよリン。お前がそんなに早く走ったのなんて見たことないって」
　ついにリンは私が機嫌のいいときだけリンを無理に引っ張って連れていく獣道へと向い始めた。
「それって……」
　そこは野犬のうんにょ、飼い犬猫のうんにょ、気味の悪い虫から

ゴミから果ては年寄りのうんにょまで様々な汚物の集まる場所だった。散歩コースとなっている農道を歩く人ですら近寄らず、分けいって入るものなど皆無に等しい。私だって、機嫌がいいときに近くに寄っていって何かないかと下世話な好奇心を満たすだけなのに。そんなところに中まで分け行ったことなんてないのに。

ぞっと体中の血が下に下がっていく感覚を始めて体験しながら、依然走りを衰えさせないリンのリードを懸命に引く。ちなみに言っておくが、私は小中高と帰宅部文化部帰宅部の所属だった。老いていて飼割れているとはいえ犬のリンの体力には到底追いつけるはずもないので、ずいぶん前に私の息は上がっている。

「い、いやだよリン！　そっちに行きたくないよ、いかないでリン、止まってリン、そんなところに向かっていっちゃ嫌だよおおお！！」

最後の力を振り絞った。上体を後ろに向けて手を思いっきり伸ばして足を踏ん張って歯ぎしりしながら踏ん張った。閉じたまぶたの裏で麦秋と呼ぶにふさわしい白金の麦の穂が揺れている光景を見た。そう、丁度リンが私を引っ張るのとは反対側に広がる美しい光景だ。ああ、せっかくならば、その綺麗な麦の穂の群れのなかに突っ込んで怒られる方を選びたかった。選択肢があるのなら。

一時間後、私はシャワーを浴びていた。リンもシャワーを浴びていた。

案の定、お気に入りのサンダルは無残に汚れ、白地のTシャツの背中には泥のまだら模様が出来上がっていた。どことなくぷーんと臭いが立ち上ってくるような気がして、母の夕食の手伝いを放棄し、まだ張ってもいない風呂に入ることにしたのだ。

父がぬるま湯を張ったキャスターがついたボックスの風呂に浸かりながら、リンは一体何を考えているのだろうか。

目をつぶって頭をワシワシ洗いながら、リンの体から汚れがお湯に染み出ていくのを想像して、それを洗い落とすべくシャワーの水

を頭からかぶった。

## （後書き）

はい、結局この飼い主ちゃんはあの獣道へと突っ込むことになります。
自分の家の周辺は田畑ばかりなので、犬のフン何かは結構道端に散らかっています。
もちろん、そんなことを気にしていたら散歩なんてできません！
ちなみに、時には道で大小構わずにしている人もいるのでそのへんもスルー。
お年寄りのルールには触れず、構わずが一番なのです……。
ちなみに人糞を見たことがあります。踏んでいる人も、見たことがあります（例によってお年寄り）
皆さん、汚れその他を気にする方はペットを飼うときに覚悟してください。

読んでくださってありがとうございました。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5891t/

散歩のイロハ。

2011年5月27日17時55分発行